かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第２４号（令和元年１１月）

掛入石

あゆむ「うほう、大きい石だな！」

ミドリ「米沢などに行くとき、この中山の石が見えていたけど、近くで見ると本当に大きい。」

ふみお「でも、昔はもっと大きかったときいているけど…。」

ミドリ「えっ！　もっと大きかったの？」

文じい「ふむ、この写真を見てもらおう。　ほれ、この通りじゃ。明治28年の写真じゃ。」

あゆむ「おお、上にたくさんの人が上がっているぞ。石と言うけれど、でかい岩だね。」

ミドリ「いったいどういうふうにしてできたのかしら？」

あゆむ「向こうの山からころがってきたのかな？」

ミドリ「それとも、地面の下から盛りあがってきたのかしら？」

文じい「大地の歴史を明らかにすることは簡単ではない。でも、山野井先生や田宮先生という人たちの調査によれば、この掛入石付近の山地が隆起、つまり盛りあがったということじゃ。」

ふみお「すると、この大石はその残りのようなものかな？」

ミドリ「でも、どうして盛りあがったりするのかしら。」

ふみお「両側から押されたりして盛りあがるような図を、図鑑で見たことがあるな。」

文じい「ふむ、そのようなはたらきがあって、この辺は東西の山がつづいていたらしい。」

あゆむ「えっ！　それじゃあここには道路はなかったの？」

文じい「そう。しかも、中山はその山のために水がせき止められて、湖であったらしい。」

ミドリ「ええっ！　そうだったの？　中山湖だったというわけね！」

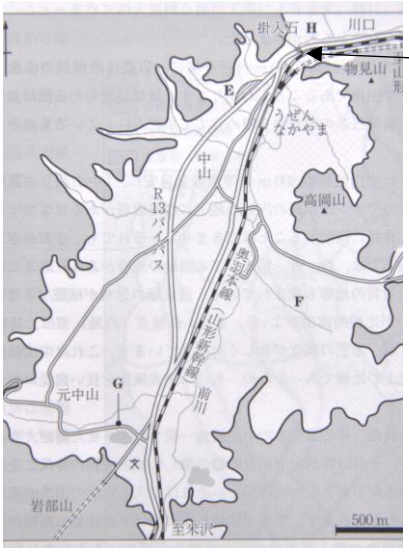
文じい「ふむ。湖の底の土が泥炭、つまり、植物がくさって泥土とまじってできる石炭になる前のような層が見えるという。その他にもいろんな湖の特徴が見えるようだ。」

あゆむ「いつごろの話なの？」

文じい「約70万年前という。」

ふみお「全然イメージがわかないけど、その後、いろいろな変化があったというわけだね。」

文じい「そう。このあたりから水が少しずつ抜け出ていって、ここは谷間となり、この大石が残ったということだ。」



掛入石　白い部分が当時の湖

『山形県　地学のガイド』（株）コロナ社

山形大学　山野井　徹教授の図の転写

ふみお「その後、この大石に侍が隠れて待ち伏せしたとかで“隠れ石”と言われたとか…」

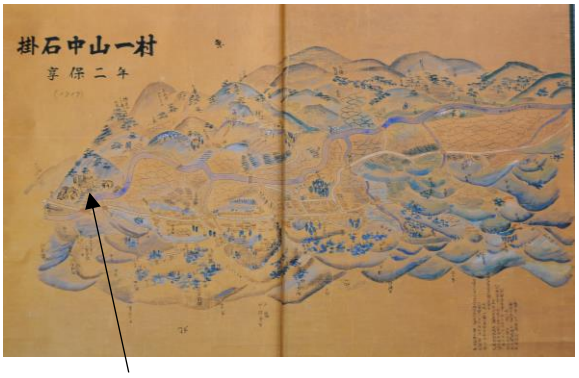
あゆむ「それはおもしろそうだな、どういうこと？」

文じい「掛入石は、古くから、向こうの南の置賜とこちらの村山との境石と言われてきた。」

ふみお「あ、だからこの下に境界標が建っているんだ。」

文じい「そう。昔の“掛石中山一村・享保二年”という絵図があるのじゃが、近くの橋は境橋とか、石の大きさが、横八間四尺（約15.8m）、長さ八間五尺三寸（約16.2m）、内長四間五尺（約8.8m）、高さ四間二尺（約7.9m）と記されている。」

あゆむ「隠れたとかいう穴が下の所じゃないか。」



「掛入石」とその寸法　さらに近くに大石が並んでいる

『白いコブシの花におう』中山地区会　より転写

前の明治 28 年の掛入石の写真も同著書より転写

文じい「慶長5年（1600）の“関ヶ原出羽合戦”で、退く豊臣方の上杉勢がこの洞窟にひそみ追いかける徳川方の最上勢と戦った古戦場の隠れ石と言われておる。」

ミドリ「古代の人の住みかなどにもなっていたかもね。」

文じい「その可能性もあるじゃろう。それから、石の上にふた抱えもあるような見事な桜があったそうだ。それは不思議に置賜方面にだけ花を咲かせ、最上方面には葉だけが茂っていたという。」

ふみお「置賜の方が南であったからかな？」

文じい「ふむ、しかし、明治13年に切り倒さてしまったという。誠に残念なことだ。」

ミドリ「そんなことがあったのね。それから、次の絵はどういうものなの？」

ふみお「掛入石の下より境橋を南に望む図と書いてあるね。」

文じい「高橋由一という方が描いたものじゃ。」

「掛入石の下より境橋を南に望む図」

『明治の記憶』三島県令道路改修記念画帖（山形大学附属博物館50 周年記念）より転写

あゆむ「今は、鉄道も道路も新しくなっている。」

ふみお「上山に鉄道が通ったのは、明治34年。」

ミドリ「その時、この石が…。」

文じい「そう、奥羽本線を敷くここでの工事は明治29年。石がダイナマイトで割り削られ、傾いてたおれた。それが今の姿じゃ。」

ふみお「そして、鉄道は新幹線が通り、バイパスが上の方を通るようになった。」

ミドリ「このせまい谷間の所で、この大石と共に数々の歴史があったのね。」

発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）